

上総守維時等打双六被突殺語第三十 <かむつさのかみ これときの らうどう すごろくをうちて
つきころさるる こと だい さむじゅ >

◎ある日、維時の家で、平維時の随一の郎等の大紀二（だいきに）が、同僚と双六を打っていた時、みすぼらしい様子の、鬢の毛をぼさぼさにふくらませた小男の侍が、盤のそばに座って見ていた。さて、大紀二の相手がよい目を打ち、それに対して大紀二が考えあぐねていると、この小男が、「こう引いたらいかが」とよい手の助言をした。とたんに大紀二は烈火のごとく怒り、「愚か者の差し出口はこうしてやる」と言って、賽筒の尻で小男の眼の縁を力いっぱい突いた。小男は突かれて涙を流しながら、立つとみるや、やにわに大紀二の顔をあおのけざまに突き上げた。大紀二は強力な男だが、思いもかけぬこととて、あおのけに倒れたところを、小男は自分の刀を持っていなかったのだから、大紀二が腰に差していた刀を押し伏せたまま引き抜き、大紀二の乳の上をこわごわ一寸ほど突き刺した。

◎大紀二は死んでしまい、小男は跡をくらまして失踪してしまった。なうての武士であった大紀二が油断したのがまずいことであった。あのように眼の縁をひどく突かれては、男たるもの、憤慨せずにはいられるわけがない。それを考えず突き殺されたのだから、人を侮るのはよくないと、大紀二を非難し合った。

鎮西人打双六擬殺敵被打殺下女等語第二十三 <ちんぜいのひと すごろくをうち かたきをころさむとして
しもをむならに うちころさること> 卷二十六

◎勇名の高い、鎮西（九州）の武者が相聲（妻の姉妹の夫）の家で双六をしているうちに、勝負に激して格闘となり相聲を殺そうとした。刀が抜けず手間取っているうちに、その家の下女どもが、主人の危機にハッスルし、粉つきの杵で武者を撲殺した話。

◎ここでも、双六による殺人の話。

今は昔、九州に住んでいた一人の男が、相聲の者と双六を打った。この男は非常に荒々しい男で、弓矢の道で世を渡っている武士であり、相聲はごく平凡な男であった。

双六というものは、元来口論が付き物であるから、ふたりの賽の目について口争いしているうちに、ついに喧嘩となった。この武士の方の男は、相聲の髻をつかみ、ねじ倒して・・・、<中略>

◎盤双六：二人で打つ。明治の前に廃れたらしい。我々が知っているのは絵双六と言うらしい。メソポタミアあたりで発生し、インド、中国を経て伝わった。平安時代に大流行、子どもの遊びと違い、賭博性が強かった。今昔物語に、二本も双六による喧嘩殺人がある。

◎「飲む・打つ・買う」なんて言葉は今では死語かもしれない。「酒はよく飲んだ 好きだった 美味かった」と若いころから言っていたが、“打つ”と“買う”はしなかった、まったくしなかったといえ、したことはあるが、深入りも後ろ髪もなかった。三つとも資金は要るにはいるが、酒は、飲み屋に入り浸れば高くつくが、家で飲む分には安いものである。打つ：かけ事をするには莫大な資金がいる。買う：買春と言うことだけど、酒を一本買う値段では売っていないので、これもけっこうな資金がいる。資金が潤沢にあれば手を出していたかと問えば、ま、あまり興味がないね、で、片づけたい。

◎賭け事の好きなご仁は知っている、とはいえプロの人は知らない。賭博、パチンコ、競馬、競輪以外に、株や物品に金をかけて、「たのむ 儲けさせてくれ」と拝んでいるのも賭けじゃないのかね。オレが絵を描いているのを知って、「将来 値上がり するかな」と笑っていた人たちがたくさんいたが、絵を売る商売の画商が、株屋街にあるのは株と同じように投機の対象として見られていたからである。この何年かいつも言っているが、「画商と言う商売は 絵を媒体にして金を転がす人種じゃねえか」とぼやき節也。
もっと単純に言えば、経済は、「社会が 賭けをする」この仕組みの総本山だね。

修行者行人家祓女主死語第二十一：巻二十六くしゆぎょうじゃ ひとのいえに ゆきて をむなのあるじをはらへして しぬること>

◎この男は、山に入って鹿や猪を食い殺させ獵をすることを家業としていた。さて、常の事とて、多くの犬を引き連れ山に入った。今度も二三日帰らなかったが、家では若い妻が一人留守居をしていた。

◎そこに修行僧の名を借りた破戒坊主がやって来て、言葉巧みに入り込み、深い山に誘い込み、若い妻をレイプしようとする。

◎一人の修行僧がやってきて、教を尊げによみ、食を乞うた。僧の様子があまりにあか抜けていたので、ただの下賤な乞食坊主ではあるまいと思ひ、この女主は僧を家に呼び上げ、食事など供養した。<中略>

「わたしは陰陽道の方にも詳しく、靈験あらたかな祭りなどもいたします」

「その祭りをすれば、どういういいことがあるのですか」

「心を込めて、精進潔斎し、その祭りをすると、病気にかからず、財宝が増え、神の祟りもなく、夫婦和合し、万事思いのままになるのです」

「ではその祭りをするのに、何が必要ですか」

「御幣を作る紙を少し、白米を少し、季節の果物と油が必要です」

「それぐらいなら、いともたやすいことです。それで祭りをさせていただきますか」

「まことに御用です」

女に、沐浴潔斎させて精進を始めた。

三日目に、「この祭りは清浄な深山にひとり行っておこなうのです」

祭りの道具をもって、女と二人だけで、深い山には行って行った。幡を立て、御洗米（ごせんまい：神に供えるための洗い清めた米）や季節の果物を仰々しく整え置き、祭文を読んで、祭りを終えた。

女は、夫の留守に、素晴らしい祈禱をしたと思ひ、急ぎ帰ろうとする。

僧は、女に若々しく美しいのを見て、にわかには欲情が募り、前後を忘れた。

「私は今まで、女に近づいたことが無いが、あなたを見て、仏様の思召しなど気にならず、思いを遂げたい」

女が逃げようとする、僧が刀を抜いて、言うことを聞かないと、突き殺すという。

僧は藪の中に引き入れ、女は逃げられもせず、僧の言うままになった。

一方、夫の方は、<中略>藪の中でごそごそ動くものを獲物と見間違え、一矢を放ったら修行僧に命中した。下の女を見るとなんと我妻であった。めでたしめでたしで終わっている。悪い奴でも殺せば殺人罪だが、この時代なのか、この場所なのか、物語なのか、ハッピーエンドである。

◎今昔物語にはたくさんの僧の話が出てくる。立派の僧から、立派だが眉をしかめなければならない僧、修行する僧、大寺院の僧、洞窟に籠る僧、乞食坊主、いろいろ出てくる。何かで、今昔物語の作者は大寺院の僧ではないのかな、という説を読んだことがあるが、仏教や僧の話は多い。

今回の話でも、女が、「下賤な乞食坊主ではあるまい」と言っているが、当時、乞食坊主がたくさんいて、飯を食わせてくれと言う話がたくさんあったようだ。「乞食坊主こそが、本当の修行僧」と言う人もいるが、人をだまして甘い汁を吸うには、小ざれいに、弁舌も説教も爽やかにこなしてこそその詐欺師、これは今も昔も変わらない。「こら ポリさん 怪しいからと オレに絡むな」「本当に怪しい奴は ちゃんとネクタイに背広を着髪をヒチサンに分け すんありしとるぜよ ほほほ」職務質問によくあうオレのぼやき。

◎3月も中旬に近づきつつあるというのに、冷たい、風も空気も冷たい。先日、天気予報氏が、「もう寒さの底を通過して これからは 暖かくなっていくでしょう 明日 明後日は 4月並みの暖かさ」なんておぬかしになっていたのを聞いた。氏の言う通り、4月並みの暖かさの日があったが、またまた冷え込んできた。「底を超えたと言ったんじゃないの」とぼやく日々が続く。たしかに真冬並みではない、真冬のころは下着の重ね着、ネックウォーマー、厚での靴下、そんなこんなでやり過ごしていたが、今はさほどではないがまだまだ寒い。今日も近畿の北部では雪が降っていると聞いた、寒いねえ。

◎昨日、高槻市の寿永地区の絵の教室で、「飲み会 いつしましょう」「今日 明日 なら空いていますよ」「今日なら 空いていますね」「大丈夫ですね」なんてことで、飲み会の相談は話が早い、即決でその日の夜に決まった。「オレねえ 午後から別の教室があって 富田には6時頃しか行けないけど・・・」「それも ちょうど いい時間じゃ ないですか」「それじゃ 6時に 例の店で」

◎阪急電車、踏切のそば、一杯飲み屋に自転車で急いだ。オレと同年輩が2名、少し若い女性が1名、80歳を超えた方が2名の5人が集まって居酒屋のテーブルに腰掛けた。4名がビールの中ジョッキ、1名が冷酒でまずは乾杯。野菜の串を、牛すじの土手焼きを、刺身の盛り合わせを、鳥の軟骨をというようなものをいくつか注文した。二人のおっさんが独り暮らしだそうで、食事の話になった。ひとは元飲食店の経営者で当時は、ほとんど一人で包丁を振るって、なみいる客の注文をてきぱき捌いていた人なので、「おかずなんて 冷蔵庫にあるものを刻んで 豚肉でもちょっと入れりゃ 美味しい物が造れる」という。彼は3年前にカミさんが無くなって、「はは もう忘れた」と笑っているが、「男はだらしない いつまでたっても 吹っ切れない」ともいう。

◎もう一人の人の話は面白い。「かみさんが亡くなって 居るときよりも よけいにたくさん 話をするようになった」「今日も 今から 行ってくるよ 絵の方がたと 飲んでくるよ」てな調子で、その日のあったことを話して聞かせているらしい。その方も毎日ご飯を炊いている。「ご飯を炊いて 供えてやらんと いかんので・・・」「おかずはねえ 今は自分で 造るように している」「お惣菜は 味が濃すぎる」「どこの店でも 同じような 物しかない 造るに限る」聞くとおっさん連はこまめに食事を造っているらしい。

◎安威川、寒いせいか人がほとんどいない。そうあのおっさん、コンクリートの上でキャンプ用の椅子をセットして腰掛け、ほとんど毎日糸を垂れている。たくさんの荷を広げ茶を飲んだり、何かを齧ったりしている。1月2月、下水場が水を排出するあたりで望遠レンズを担いだ何人かが、日々入れ替わりレンズを覗いていた。下水排出の水は栄養素が豊富なのか、小魚が多い？ 喪類がよく育つ？ たくさんの水鳥が集まっている。いつも、10羽、20羽とブロックの上やら中洲の上でたむろしている。カモ類やオオバンは流れに任せて水面をついばみ、顔を水中に入れる。カワウは佇んでいる、羽を広げて乾かしている。サギも暇そうに立っている。ススキは枯れて冬景色だが、3月になると土の上の草が緑色になってきている。クローバーが勢いよく緑、小さい花が、黄色やピンクが咲いているのが見られる。菜の花の黄色もあったね。

どこの国青年かわからないが、中洲に生えた葉っぱを採って、ごっそり自転車の籠に入れて、「あんなものが喰えるのか」「草とはいえ 広げた葉 喰ったら美味いかもしい」「彼らの国では 重宝された草かもしれない」あらためて見ると、柔らかそうで美味そうに見える。

◎我が家の梅、植木屋が上手く選定、ほとんど花が咲かなかったね。ボケもおかしい、花も葉もない、あの白っぽいピンクが気に入っていたが・・・。クチナシはやっと小さい新芽の緑が出てきた。蛾のスカシバ・・・君の毛虫が葉っぱを全部喰ってしまっただけで丸坊主である。水仙は終わったね。白いバラはこれからだ。ぼちぼちいろんな花が咲いてくれる、これは小さな喜び。えかき生活も、前の絵の修繕の日々、楽しいねえ。

- ◎9時：北小松駅でスパッツを着け出発。登山客はだれもいない。快晴だ、いい感じに晴れている、しかも暖かい、防寒具をしまいセーターでじゅうぶん。昨日は大阪でも寒かった。車窓から見ると、比良の山脈には白いものが連なっている、まだまだ雪が残っていたのか、それとも昨日降ったのか。
- ◎2.3日前に、「この日は 晴れる 若狭駒に 行きましょう」と何人かに連絡したが、お一人だけ行けるといふ。人がほとんど入らない山なので、ふたりだけじゃ不安なので、行先を比良に替えひとりで登った。
- ◎10:15 1時間ちょっとで涼峠にやって来た。駅が100、登山口が250、涼峠が500メートルらしい。暑い、汗が出る、地面は雪だ、ここまではいつものペース、いつものように釈迦岳を超えて比良駅から帰るつもり。
- ◎ヤケ山の標識に出た。先日来、「蛇谷が岳に 登ろう ただ スキー場情報では 積雪ゼロ ダメだね」と話があったが、ここから蛇谷方面を見ると、麓にはまったく雪は無いが、反射板の光るてっぺん付近は白く見える。このあたりの山は、500メートル付近で30センチぐらいの積雪のようだ。若狭駒の方はもっと積もっている、しかも人が少ないのでトレースがないかもしれない。武奈ヶ岳も琵琶湖バレーも真っ白けなり。
- ◎ちょっと早いアイゼン装着、これまた10分以上かかってしまった。このアイゼン40年前に買ったきりほとんど使っていなかった。40年前の靴にあわせてベルトが調整してあるのでこれはいかん、しかも古い品物で、底に雪団子がどっさり付き歩きにくい。帰って考えたのだが、アルミの薄板を買って来てアイゼン底に張り付け加工なんて考えている。それよりいつもは杖がわりのピッケルが、今回は大いに活躍した。
- ◎さあ、ポトムだ、鞍部から登りだすぞ、雪が深くなってきて潜る、エイコラ、クソオ。なんと前に人がいる、悪戦苦闘している。「ああ もうだめだ ぼちぼち 引き返す まだまだ遠い 今日は 無理だ」オレと同じジジイの単独である。年を聞くと、「もうすぐ 85 だ よくここまで 登れた もんだ」「えええ 85 歳ですか オレなんか まだまだ 若造 なんとか上まで 行きます」すごい爺さんに会った。
- ◎このあたりから時間が気になりだした。「釈迦岳を2時半に通過すれば・・・」「ヤケオ山を1時半に通過すれば」「なんとか 釈迦岳まで登り切って 琵琶湖の方に 下りたい」ただ雪は深い、一步一步に時間がかかる、ボコリ足が雪に嵌まる、急斜面ではラッセル気味になってきた、ピッケルを突き立て膝をついてエンヤコラ。踏み跡はあるが今日のモノではない、エンヤコラ、それ行け、やれ行け、である。
- ◎1:30 ヤケオ山着。カップヌードルに湯を入れおにぎりを食べた。近所のスーパーで買ったおにぎり、美味しそうだが食べにくい、アウトドアではコンビニの定番おにぎりがいい、食べやすく味もいいような気がした。このペースなら2時半に釈迦岳を通過できそう、なんとか向こう側に降りられるだろう。雪の中、暖かくセーターだけ、お陽さんがキラキラ、雪の反射で顔が焼けそうだ。琵琶湖がかすんで見える、まわりの山々もかすんでいる、真っ白い雪に背の低いヒヨロヒヨロの樹が一本二本と立っている。
- ◎歩きながらふと考えた。オレは何が好きなんだ、なんでしんどい山を楽しんでいるのだ。そうだね、頂上を極めたいわけでもなし、名山を踏破したいわけでもなし。ただ歩いているのがいい、空気を吸って空を見て地面を見て歩いているのがいい。欲も得もない、腹が減ったら何かを喰い、喉が渴けば水を飲み、時々上を見て、下を見て歩くことができたらいい。それでも景色はいいに限るね、自然がたっぷりあって、人も少なく、そんな斜面を、自然道をモクモク歩くのがいいね、ただ歩くだけでいいのだ。嫌なのは、雨の日だね。道に迷ってわからなくなるとパニックだね、この経験は一度もない。時間をみ誤って暗くなり帰れないのも嫌だね、これは何度かあるが、道がわかっていただけから、ま、帰れた。
- ◎深い雪、時間がかかる、進まない、雪のない季節なら釈迦岳まで30もあれば行ける距離、「こらあアカン タイムオーバー 引き返すか」ということでゆっくり来た道を帰り始めた。下りは早い、踏み跡も気にせず、新雪をずぼずぼ踏み込んで降りていく。4時にヤケ山に着いた。「涼峠：4時半 登山口5時 かな」
- ◎下りながら何度も雪を口に含んだ。こんなことも長らくやってなかったが、氷のかけらのような雪がシャリシャリ口の中で融けて美味い。5時に登山口、駅に近づくと電車が走り去るのが見えた。5:24分の新快速に乗り遅れ、6時の普通に乗った。家に帰り着いたのは7時半。風呂に入って、お神酒をいっぱいいただいた。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オホナムジはいよいよ、オホクニヌシと変身し、葦原の中つ国の主となる。そうなる前に、スセリビメと手に手を取って、スサノヲから逃れるために走った。

追いかけてきたスサノヲは、追うのをあきらめ、「そこに居る 我が娘 スセリビメを正妻（むかひめ）として 宇迦の山のふもとに 土深く掘り下げて 底の磐根に届くまで 宮柱を太々と突き立て 高天原に届くまで 屋の上のヒギを 高々と聳やかし 住まうのだ」

オホクニヌシ：大国主：と名乗るのだ。

◎稲羽の旅から始まって、苦しく遥かな道のりだった。

◎稲羽のシロウサギのところで、「あなたのもとに嫁ぎたい」と言って、八十の神々を敵にまわ巢ことになってしまった元凶の、セガミヒメがいた。そのヒメとはじめの契り通りに、出雲の国に連れてきたのだが、ヤガミヒメは、正妻であるスセリビメの妬みをおそれて、みずから生んだ子を木の俣に刺し挟んで、稲羽の国に帰ってしまった。

◎出雲大社

2000年に、出雲大社の境内から、巨大柱の遺構が発見された。杉3本を束ねた巨大柱。

◎大林組：出雲大社には古来不思議な言い伝えがある。大昔の本殿は、全高が16丈（48M現在の神殿の2倍）だった。しかし歴史の専門家たちは、古代の技術ではそんなものが造れない、単なる伝説だといわれていた。

◎970年に書かれた口遊（くちづさみ）の中に、建物の大きさ比べ、「雲太（出雲大社） 和二（大和東大寺） 京三（京都平安京）」現在の出雲大社は1774年造替時のモノで国宝。

◎金輪造営図：伝わっている絵から資料をおこして行く。H：48M 神殿：12X5M 柱：3M径 柱：H：42M 重い柱で240T 柱を立てるには、人力だけでは6000人が要る。古代寺院建築ではロクロを使っていた、それだと200人ぐらいで柱が立てられる。ロクロ：クレーンのように引っ張り上げる仕組みかな。

◎現代建築の、意匠、構造、現場と復元作業をした。工期6年、人員13万人、121億円の試算になるらしい。

◎大林組がこんな作業をしてから後の2000年に3本柱の遺構が見つかった。遺構は4世紀ぐらいかな。

◎仁徳天皇稜

◎話のついでに、大林組が、「復元：仁徳天皇稜」の資料がネットで出ているので紹介。

◎大林組：古代の土木工事では、使用する道具は、先端に鉄製の刃を付けたスキやクワ、土砂運搬はモッコぐらいであった。中を盛り土するための土の量は、濠を10M掘らなければならないが、10Mも掘ると地下水が湧き作業が不可になるのでせいぜい5Mまでしか掘れない。あとの土は外部から運ばなければならない。土はモッコを使った、二人一組で60K運ぶかな。

◎斜面をびっしり覆う葺石は、石津川で採取し、選用水路を開削して古墳斜面までいかだで運んだ。

◎工事の内訳：用地伐開除根（更地にする）、測量、外・内濠掘削（くっさく）、排水工事、客土、葺石、埴輪、石室（埋葬室）、後片付け、現場宿舎・・・等らしい。大林組：関西空港埋め立て工事より大変では・・・。

◎現場には一日3000人ぐらいが働いていた。その3000人を支えるため、もう3000人がいたのでは・・・。

◎灌木がまばらに生える程度の草原なら、ノコギリ、斧、スキ、クワ等で更地になるのでは。

◎現場で一点を決め、丸や四角を描いて、地割図を作り、杭を立て、荒縄、水系を張っていく。

◎盛り土は足で踏んで固めたものだろう、それが1500年経っても崩れないのは脅威だそうだ。

◎古墳時代には、牛馬が使われていなかった。

◎当時、人力による細かい作業、葺石工事などに人力の品質の良さが現れる。1500年経っても土木工事は今も昔も同じであると、大林さんは言う。

◎8時50分北小松駅着の電車を降りた、またまた比良に来ております。5日前のオレの苦闘と申すか、晴れ姿といおうか、そんな山の写真を皆さんにお見せしているうち、「素晴らしい わたしも 雪景色が見たい 行くが まさか 岡村さん 行ったばかりなので 今日の明日は 無理ですよ」とお誘いを受け、「今日の明日とはいえ 行きますよ 釈迦岳 リベンジしたい」と伝えた。5日前は体調も万全、いつも通りに涼峠を越え、ヤケ山にやってきたころには雪が20センチぐらいに積もっていた。ズルズル滑るので6本爪のアイゼンを着け、すぐに歩きだし、さあここから登りだというところで時計を見ると、「え こんな 時間 こらあ遅い スパートを かけんと」とエッチら登るが、足が雪に潜る、ピッケルを突き立てどっこいしょ、「こらあ時間がかかる なんとか釈迦岳を超えたい」と登った。雪がなければ釈迦岳まで20分か30分かというところで断念した。普段なら20分か30分で行けるところが、もっともって時間がかかりそう、もう撤退しないと登山口まで帰り着かない、ジャンねんだが、と下った。

◎八尋さん：初めてお会いする85歳の方と、最近結婚をして、娘に孫が生まれ、お祝いずくめの、のり子さんと3人車中の人となった。

◎5日前、オレの前で雪と格闘してもがいている方の歳を聞いてびっくりした、85歳。よくまあここまで単独で登ってこられたと感心した。今回お会いした85歳の方、これまた元気には驚いた。山の斜面をノンストップでぐんぐん登っていく、「ちょっと 休憩しませんか 一本取りましょうよ」思わず言ってしまった。若いころから、1時間ぐらいで一本取るスタイルでやってきたので、1時間を超え、1時間半なんてなってくると、情けなくも身体が悲鳴を上げる。山田さんが、「90歳近い方が すごい 我々と同じように登っていく」とおっしゃっていたけど、80歳代でも90歳代でもすごい人がいるもんだと感心。

◎電車の中で、釈迦岳の雪の話、5日前の撤退の話、アイゼンとピッケルの話、ラッセル状態の話をした。「この5日間で 雪の量がどこまで減っているか 少なくなっていたらいいねえ」「え 雪があるの」「雪の恰好はしてきていない」「・・・」「それじゃ 雪の釈迦はやめて 鳶岩にしましょう」なんて決まって歩き出した。残念だけどリベンジは無した。今年は3回ぐらい近畿の雪山に行くことができた、ま、これで満足しておこう。

◎楊梅の滝に向かって右側に“比良げんき村”という施設がある。いつもそこを横目に見て通り過ぎるのだけれど、今日はその中を通って行き、小さい流れを過ぎたところに赤い標識がぶら下がっている。「ここだ 前に来た 鳶岩を目指して・・・」と登り始めた。先日は一本目から雪があったが、今日のこのあたりは地面も乾いて雪のかけらもない。広葉樹林帯の中をエッチら登っていく。先日も温かかったが、今日は暑い。防寒用のそれぞれを脱ぎ、上着も脱ぎ、シャツ3枚ぐらいで歩いているが、顔じゅう汗だらけである。

◎今日の山域は標高が低い、500メートルぐらいのデコボコ地帯、向こうに見える釈迦岳への稜線はまだまだ白い、たっぷり雪が残っているようだ。釈迦岳に登っていれば、今日もまた撤退だったかもしれない。ちょっと下ったところに岩がありそれが鳶岩である。その上に立って下を覗くとぞっとする崖の上、「こんな所って どこにでもありそうな でも オレは こういう場所は アカン」てな感想である。

◎まだ昼飯には時間が早いと歩き出して、牛山に向かう。わざわざ電車でこんな遠いところまで来て、横に雪が被った山があるのに、向こうは1000メートルなのに、ここは500メートル地帯、残念無念と思う。ま、これが近所にあればなかなかいい山なんだけれど、樹林帯の中、景色もよくない、樹も楽しくないとぼやきながら歩いていた。

◎12時頃に、「お 池だ」「牛山の池」というところに着いた。「昼飯にしよう」と3人で地面に座った。朝からずっと快晴の日より、暖かく花粉も多く飛んでいるのかやたらにくしゃみが出る。オレがいつもチェックする“高原の天気”というサイトでは、武奈ヶ岳は、「今日は登山に適さない」と出ていた。風がきつそうなマークが出ていたが、このあたりはまったく穏やかである。あまり人が入らない山なのか、皆さんが付けた赤やら白やらの紐やテープが所々にぶら下がっている。スマホの地図をにらみながら、はじめての道、「等高線によるとこっちな」なんてだんだん楽しくなってきた。4時半の電車に乗って帰った。

◎今日のぼやきは、先日来の人との出会い、こんな奴と会った、こんなことがあった、なんて普通の日記風に書いてみるが、個人的なことなので、照れくさいことでもある。

◎今、JR 八尾駅の階段を上ったところにいる。八尾郵便局の隣あたりで山の会の集まりがあるという、それに参加してはといわれ時間は午後 2 時からだ。折角だから旧友のフセ君宅に寄ろうと朝の 9 時半に家を出た。今年に入って、アンドウ宅とフセ宅に行かなければと思いつつも重い腰がなかなか上がらなかった。アンドウ宅には近代的な薪ストーブがある。建築家の彼がなかなか格好のいい家を施工し、その大フロアに黒いそれが鎮座している。ストーブは古いものであれ近代的なものであれ、大量の薪の消費と煙突掃除は欠かせない、この邪魔くさい作業は時代が変わっても器具が替わっても同じだそう。登山で行くやまの登り口あたりの家の庭先には、大量の薪が積んである、暖かい季節冬ごもりのために用意しうず高く薪を積んでいる姿をよく見る。アンドウ宅はその薪ストーブは来客世に使うだけだと思いがそれでも軽トラック一台分ぐらいの薪がひと冬に要りそう。六甲に住むフクイ宅では同じような薪ストーブのために軽トラックを買ったという。

◎アンドウ宅の丸太が割れないという。「うっとこ でかいハンマーと でかいヨキがあるので 割ってみる」と持ち帰って半年、なんとかひと抱かえの薪が割れたので、数日前に車で届けた。フセ宅は、「おまえ 先日もらった絵 額 付けに来る 言ってたけど なかなか来ない やんげ・・・」と戒められ、「そんなことが あったかいな・・・」と思いつつお買い上げは本当のことだから平身低頭、「そのうち 行くぞえ」とまたずるずる延ばしていた。せつかくの八尾だからついで行こうと決め、絵の寸法を聞き、材料の木の棒とノコギリ、キリとくぎなんて材料をカバンに入れた。

◎八尾は二十歳代に 5 年ほど住んだことがある。天王寺の美術館で知り合った連中に八尾出身者が何人かいた。我々夫婦がその家を出たあとにカミさんの両親が住んでいた、我が娘二人のへその緒もその近所の産院、そんなこんなで八尾は第二の故郷とまでは言わないがよく知った場所である。

地下鉄日本橋駅から近鉄線に乗り換えた、「近鉄電車に乗るのは 20 年ぶりぐらいかな ええと 何行きの電車・・・」おぼろげに思い出し、「どこかで八木方面行の電車に 乗り換えるのだった」トイレにも行きたいので大きなターミナルの上本町で乗り換えた。信貴山口へは河内山本で乗り換えとなっている。前の日にパソコンでフセ宅を検索していたので、約束の 11 時に着いた。簡単額は 30 分でやつつけられた。「飯でも行こうや」「あかん 今から 八尾で 会食がある・・・」ゴボウ茶を馳走になり、12 時に出た。

八尾の地図も検索していた、八尾郵便局はまっすぐ東に向かう。まずは高安を超え、そのまま東に進む、いたってわかりやすい。昔毎日のように使っていた近鉄高安駅の踏切を渡り、昔住んでいたあたりに近づいた。まず産院は無くなっていたが、住んでいたぼろ屋はまだそのままの姿でどなたかが住んでいるようである。どんどん歩いていくとすぐに八尾郵便局が見つかった。雨が降ってきて風が冷たい、小さい傘をさして時間つぶしに JR 八尾駅付近をうろうろ、なんと“長瀬川”を発見。長瀬には我が家の墓があり、その傍に 10M 幅ぐらいの用水路が長瀬川だ、墓には年二回以上通っている。長瀬川の解説標識を読むと、長瀬川のところに大昔、大和川が流れていたらしいが、人為的に付け替え工事が 1700 年頃に行われ、農業水路として残ったのが長瀬川だそう。長瀬川は長瀬だけでなく、八尾、東大阪などを通っていると書いてありわくわくした。

◎2 時に目的地に着いた。山の会の事務所があり、集まりがあるからと誘われた。どんな会で、どんな山を登るのか、まったく情報を知らされていなかったが、「なにも知らない」という状態もいいものである。会費が 3000 円、親睦会が 3000 円と聞いていた。皆さんの話を聞いていると、名簿も会則もない親睦会のような会である。ハイキングが多いようだが、この半年の山行予定には、比良や鈴鹿、北アルプスも含まれている。小屋泊もテント泊も自由とはありがたい意見が飛ぶ、いくつか一緒にしたい山の名もある。「ジジイは ひとりで山に入っちゃいけないよ 発見が遅れるから」「天王山でミツマタが満開」「奈良の葛城山でハイキング」「雷鳥沢でテントを張って トレッキング」こんなぐらいは参加してみようと思っている。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎さて、葦原の中つ国の主となったオホクニヌシ、強い弓矢を持つお方、ヤチホコとも呼ばれておった。この神は色ごとにかけても並ぶ神がないほど、口の悪い輩からは、おのれの身のホコがすごいから、ヤチホコ様じゃと、言うて笑っておるかも・・・。

◎ある時、高志（越）の国の、ヌナカハヒメのもとに妻問いの旅に出かけた。さすがのヤチホコも、その夜は思いを遂げることができないまま夜が明けてしもうた。次の日の夜にめでたく、ヌナカハヒメと共寝なさったのじゃ。

◎ヌナカハヒメ：新潟県頸城郡奴奈川・・・かな？ ヒスイの川：直線距離で550キロ。

◎ことは成就、なれど、こんなことが度重なり、後のスセリビメがひどく嫉妬された。うわなり妬み：正妻が新たな女に嫉妬する様。男神も困ってしまって、長く連れ添ったスセリビメがいやになってしもうた。

ヤチホコは、出雲の国から倭の国へ上り行こうとした。まこと出ていくつもりだったのか、ポーズだったのか。

◎ヤチホコの歌

ぬばたまの くろきみけしを	ヒオウギの実の 黒い衣を
まつぶさに 取りよそひ	すきもなく 粹に着こなし
おきつとり むな見るとき	羽繕いする海鳥よろしく 胸元見れば
はたたぎも これはふさはず	着心地確かめ これは似合わず
へつなみ そにぬきうて	後ろの波間に ぼいと脱ぎ棄て
そにどりの あおきみけしを	カワセミ色の 青い衣を
まつぶさに 取りよそひ	すきもなく 粹に着こなし
おきつとり むな見るとき	羽繕いする海鳥よろしく 胸元見れば
はたたぎも こもふさはず	着ごこちたしかめ これも似合わず
へつなみ そにぬきうて	うしろの波間に ぼいと脱ぎ捨て
山がたに まきしあたねつき	山の畑に 蒔いたアカネを臼で搗き
そめきがしるに しめころもを	染め粉の汁で 染めた衣を
まつぶさに 取りよそひ	すきもなく 粹に着こなし
おきつとり むな見るとき	羽繕いする海鳥よろしく 胸元見れば
はたたぎも こしよろし	着ごこちたしかめ これはお似合い
いとこやの いものみこと	いとしいやつよ わが妹よ
むらとりの わがむれいなば	群れ鳥のごと われがみな旅立ったなら
ひけとりの わがひけいなば	引き鳥のごと われがみな引き連れ行けば
泣かじとは なはいふとも	泣きはしないと お前は言うが
やまとの ひとつとすすき	山のふもとの ひと本ススキよ
うなかぶし なが泣かさまく	首をうなだれ お前が泣くさまは
あさあめの きりに立たむぞ	朝降る雨が 霧に立つごと涙でぐっしより
わかくさの つまのみこと	萌え出た草にも似た 若くしなやかな妻よ
ことの 語りごとも こをば	お語りいたすは かくのごとく

◎愛しい妻よ、わたしが大勢の供を連れて行ったならば、あなたは強がっても、泣くことだろう。朝の雨が霧となり立ち込めるだろう。

